

## 学生支援事業活動報告書

1. 活動名 岩手県陸前高田市広田地区、小友地区における学習支援活動「夏の楽習会 2018」

2. 指導教員：日本赤十字北海道看護大学 教授 根本昌宏

参加学生：看護学部1年生4名、2年生1名、4年生2名（災害 beatS 研究会所属）

### 3. 要旨

2018年8月10日から13日の期間に上記活動を実施した。

2011年8月に初めての楽習会を開催して以来7年、20回目の活動となった。

楽習会の認知度は高く、バスケットや水泳を楽しんでいる子どもたちから「看護大学のお姉さん！」と声をかけられる場面が多くあった。子どもたちの口コミで日を追うごとに参加してくれる子どもたちが増えるとともに、保護者の方からは、子どもが夏休みの宿題をどんどん進めていること、楽しそうに今日あったことを自宅でお話していることなどに感謝の言葉をいただいた。

一日の活動を終了後、自分たちが活動する意義をふりかえりて認識し、次の日のためにレベルアップした活動を計画していた。今回も子どもたちとの関わりによって、日を追って著しく成長する学生の姿が見られた。7年が経過し、復興がまだ途上の陸前高田市において、本学の学生が活動することには意義がある。これからも細く長く継続・持続できる体制を形作っていきたい。

## 学生支援事業活動報告書

### 1. 活動名 第9回 日本赤十字六看護大学学生交流会

2. 指導教員：日本赤十字秋田看護大学 教授 廣渡 太郎  
参加学生：看護学部2年生5名、3年生6名

### 3. 要旨

日 時：平成30年8月21日（火）、22日（水）

場 所：日本赤十字秋田看護大学・日本赤十字秋田短期大学、  
仙台市立荒浜小学校、若林区若林市民センター

#### 1) 目的

本学防災キャンプを通して、防災・減災のノウハウを楽しく学び、防災キャンプの魅力を他の赤十字大学の学生と共有する。また東日本大震災から7年を経た現在の被災地の状況を知ることあわせて防災・減災への意識・関心の一層の向上および各大学における情報・知識の交換を目的としている。

#### 2) 活動内容

8/21（火）1日目

- (1)開会式
- (2)アイスブレイク
- (3)各大学紹介
- (4)本学(日本赤十字秋田短期大学)講師 及川真一先生による講義
- (5)水のろ過体験と昼食
- (6)テント設営・片付け
- (7)片付け・解散

8/22（水）2日目

- (1)仙台へ移動し、仙台市立荒浜小学校見学
- (2)学生間でのフィードバック・振り返り共有
- (3)閉会式
- (4)仙台駅で現地解散

#### 3) まとめ

本学での開催ということで、本学の特徴的な取り組みである「赤十字みんなの防災キャンプ」を通して、防災・減災について楽しく学ぶことができるように企画した。自分の大学ではできないようなことを経験できたという声が多く、本学防災キャンプの魅力共有することができた。また荒浜小学校の見学を通し、現在の被災地の状況を実際に目の当たりにし、「復興」について学生ひとりひとりが深く考えることができた。またそれを各大学間で話し合っ共有したことで、自分の視野が広がり人とのつながりの大きさを感ずることができた。

## 学生支援事業活動報告書

### 1. 活動名 第9回 日本赤十字六看護大学学生交流会

2. 指導教員：日本赤十字看護大学 教授 遠藤 公久  
参加学生：看護学部1年生4名、2年生2名

### 3. 要旨

2018年8月21日、22日に、日本赤十字秋田看護大学にて第9回 日本赤十字六看護大学学生交流会が実施された。以下は主なプログラムである。

21日

- ・テント設営
- ・野外での昼食づくり
- ・濾過体験

22日

- ・仙台市立荒浜小学校の見学
- ・全体の振り返り

1日目は実際に被災した際に役立てることができるものを教わり、体験した。

被災地においてテントは居住スペースという使い方だけでなく、荷物置き場や授乳スペース、子供の遊び場としても役立てられた。テントには様々な活用方法があるということを知り、構造を知りながら設営を行うことができた。

濾過体験や昼食づくりでは、限られた資源をいかに活用するかということを知った。汚い泥水も、炭・砂利・布を使って何度も何度も濾過をすればきれいになった。ホットドックは牛乳パックを燃やして調理した。災害の際にたとえライフラインが途絶えたとしても、身近なもので活用できるものはたくさんあるということを実感した。

2日目は被災地の見学を行った。荒浜地区は小学校以外の建物は何も残っておらず、津波の威力にただただ驚いた。以前の荒浜地区のジオラマがあったがあまりにも景色が違って、そこに人が住んでいたというのが信じられなかった。

災害に対して備えようというのは簡単だが、それを実際に行動に移すのはなかなか難しい。今回は自分の大学では絶対にできないような貴重な学びを得たので、その知識は自分のものにして、実際に行動に移したいと思った。

## 学生支援事業活動報告書

### 1. 活動名 第9回 日本赤十字六看護大学学生交流会

2. 指導教員：日本赤十字豊田看護大学 講師 長尾 佳世子  
参加学生：看護学部1年生1名、2年生1名、3年生 2名

### 3. 要旨

平成30年8月20日～22日（移動日を含む）の期間で、会場は日本赤十字秋田看護大学を中心に実施。

各大学の特色やその大学が力を入れていることの紹介から始まった。サークル活動では赤十字の大学ということもあり、防災系のサークルが多く、防災キャンプや海外でのボランティアを行うなどの個性が現れる紹介があった。

次に赤十字防災ボランティアステーションの及川先生による講義に始まり、野外での防災キャンプを行った。火の起こし方や水のろ過方法、テント設営など、野外での生活の知識を得ることができた。また、大学内だけでなく周りの地域や企業も巻き込んでキャンプを行うことにより、知識や技術を共有することの大切さを学ぶ機会となった。

翌日には仙台市へ移動し、仙台市立荒浜小学校の見学とビデオの視聴を通じて災害の恐ろしさと防災や自助・共助の必要性を再認識する機会となった。

最後に振り返りを行うことにより、今回学んだことを次にどのように繋げていくかを考えることができた。また、2日間、他大学の学生と一緒に学ぶ機会を持ち、情報交換を行い、お互いに協力し合えたことが学生にとって大きな財産となった。

## 学生支援事業活動報告書

1. 活動名 第9回 日本赤十字六看護大学学生交流会

2. 指導教員 日本赤十字広島看護大学 教授 奥村 ゆかり  
参加学生 看護学部2年生1名

3. 要旨

日程：平成30年8月21日（火）～22日（水）

場所：日本赤十字秋田看護大学（秋田県秋田市）

テーマ：「野外キャンプを通して、防災・減災のノウハウを楽しく学ぶ」、「東日本大震災から7年を経た現在の被災地の状況を知る」

内容：

（1日目）赤十字防災ボランティアステーションの及川先生による講義では、東日本大震災の際に被災地で経験されたこと、熊本地震の発災後にボランティアとして被災地を回り、車中泊をしておられる方に声をかけ、その人たちのためにテントを提供し避難生活の環境を整えた際の話聞いた。講義後、グループに分かれて大小様々な石や布、炭などを使って水の濾過体験をした。最後に実際にテント設営をした。

（2日目）宮城県仙台市立荒浜小学校に行った。荒浜小学校では、映像やガイドの方の話を通して発災当時の荒浜地区やそこに住んでおられた住民の方の様子を知ることが出来た。荒浜小学校には、震災前の荒浜地区のジオラマが展示してあり、今は更地である土地の震災前の日常の生活を実感した。その後、若林区若林市民センターに移動して、グループに分かれてこの2日間の振り返りを行い、その共有を行った。

## 学生支援事業活動報告書

1. 活動名 第9回 日本赤十字六看護大学学生交流会

2. 指導教員 日本赤十字九州国際看護大学 教授 大重 育美  
参加学生 看護学部3年生4名

### 3. 要旨

第9回 日本赤十字六看護大学学生交流会は、8月21日から8月22日に日本赤十字秋田看護大学で開催され、本学から4名が参加した。今年は、災害時の対応に関する講義や演習に加え、実際に東日本大震災の被災した地域の見学を行った。

交流会1日目は講義を受けた後、東日本大震災から月日が経った現在、「復興」とは何かを参加者全員で考え、討論を行った。その後、日本赤十字秋田看護大学で実際に行われている防災キャンププログラムを実施した。学生からは、いつ災害が起こるか分からない状況で防災として自分が生きる術を身につけることも1つの方法であり、防災は災害が起こった時のために必要なものを揃えておくことのほかにも身近なものをどう使うかということではないかと意見を述べていた。

二日目は東日本大震災で津波の被害を受けた宮城県の荒浜小学校を見学した。被災から7年が経過した今でも、荒浜地区の海水浴場は遊泳を禁止されていることや、付近では堤防や底上げ道路の建設が進んでおり、学生からは復興とは何なのか今一度考えさせられたと感想が述べられた。

参加者からは、本交流会を通して、赤十字大学の方と交流を深めることができ、相互に意見を交換することで、集会終了後も、将来に向けての学修に対するモチベーションにつながったとの感想が聞かれた。